持論時論

震災津波 語り継ぐ場に

被災地に「巡礼のみち」

東北お遍路（こころのみち）プロジェクト理事
会沢　浩平
（75歳・仙台市青葉区）

東日本大震災の被災地には、今年も多くの人が訪れました。バスツアーやマイカーによる一般の方も、自治体の防災担当者もいます。しかし、被災地は震災発生から1年8カ月たっても、復旧・復興は思うように進んでいません。メディアによる被災地からの情報発信は少しずつ減り、支援ボランティアも少なくなりました。時間の経過とともに人々の記憶が薄れ、風化していくのは、ある程度やむを得ないことかもしれません。

震災直後、「何かしたい」「私に何かできることはないか」という思いを抱いた人がたくさんいました。相馬市で環境保護運動などに取り組む新妻香織さんの呼び掛けで青森、岩手、宮城、福島県の約20人が仙台市に集まり、意見交換したのが昨年9月でした。新妻さんを代表に「震災巡礼東北の道を考える会」が発足、今年夏に「東北お遍路（こころのみち）プロジェクト」に衣替えし、10回以上集まって議論を重ねてきました。

◇　◆　◇

私たちの最も大きな取り組みは「巡礼のみち」事業です。犠牲者の鎮魂、慰霊のため、三沢市からいわき市まで、被災地の太平洋岸に450キロの「巡礼のみち」を設定します。

巡礼と言えば八十八カ所巡りの四国お遍路が有名ですが、こちらは、いつでもどこからでも参加できる直線型のルートです。徒歩、自転車、車と、交通手段は自由。日本はもとより、世界中にお遍路さんへの参加を呼び掛けたいと思っています。ルート上に、津波被害を伝えるための場所や復興のシンボルになっている場所など、八十八カ所の巡礼ポイントを設けます。今年4月にホームページ「東北お遍路（こころのみち）プロジェクト」を開設、巡礼ポイントを一般公募しています。

これまで100カ所ほど候補地が挙がっています。例えば、蕪島神社（八戸市）、大平墓地公園（釜石市）、閖上漁港と日和山（名取市）、安波津野神社跡（福島県新地町）など。いずれも被災地や被災地を望む場所です。ホームページによる公募は、現在も続けています。

ほかに巡礼マップの作製、共通の道標設置、被災情報の記録を何らかの形で継承していくシステムをつくる―などの事業を考えています。キーワードは「震災津波の記憶を1000年先まで語り継ぐ」。

◇　◆　◇

被災地を歩けば、「これからどうなるのでしょう。不安です」「原発事故による風評被害の影響は、遠く離れたここまであります。水産物が売れません」などという声が、今も絶えません。

被災地は大きな被害を受けましたが、長く変化に富んだ太平洋岸の天然観光資源はなくなっていません。各地に水産市場、神社仏閣、歴史関連の資料館もあります。語り部に加わっていただき、「巡礼のみち」を地域住民と巡礼者の交流の場としたい。震災犠牲者を慰霊するとともに、自治体の枠を超えた太平洋被災地域のネットワークをつくり、地域文化の継承・活性化に貢献できればと考えています。

23日午後4時から仙台市青葉区の市福祉プラザで、プロジェクトのシンポジウムを開催します。今後の予定などを報告し、皆さんの意見を聞かせてほしいと思っています。そして、一人でも多くの人たちに「巡礼のみち」を歩いていただくのが私たちの願いです。

（投稿）